

熊本大学広報誌

熊大通信

vol. 67
2018 WINTER

特集Ⅱ

特集Ⅰ

挑む。
命の質に関わる研究
五高×七高
変わらぬ絆が、今も、ここに。

Takomy M.

ダメと決めつけるのはたやすい。
しかし、改善の余地ありでなければ、
創造の将来はない。

— 立石一真（オムロン株式会社創業者）



熊大で生きる君たちへ

修復中の熊本大学工学部研究資料館

オムロン株式会社を創業した立石一真は、大正10(1921)年に熊本高等工業学校電気工学科(現:熊本大学工学部)を卒業した。昭和8(1933)年にオムロンの前身である立石電機製作所を設立し、自動券売機、電子自動信号機などの開発で、日本のオートメーションを牽引。日本のベンチャーの先駆けとなった。立石が在籍した時代も使われていた煉瓦づくりの機械実験工場は、現在熊本大学工学部研究資料館となっており、明治時代から使われていた工作機械や歴史資料などを展示している。熊本大学工学部は平成29年に120周年を迎え、その伝統を次の世代にも受け継ごうとしている。

※熊本大学工学部研究資料館は、熊本地震による被害のため長期休館中です。

CONTENTS

- 03 特集Ⅰ 挑む。命の質に関わる研究
- 11 研究室探訪 子どもたちが「自分を向上できる」その自信を育む体育教育を考える
教育学部保健体育 坂下 玲子 教授
- 13 特集Ⅱ 五高×七高 変わらぬ絆が、今も、ここに。
- 17 卒業生ジャーナル
- 19 KUMADAI TOPICS
- 22 熊本大学基金よりお知らせ

表紙 / 【原画】松永 拓己 / 教育学部 准教授
特集1の内容から想起された、医学部の山崎記念館と記念樹である楡(かい)の木を描いた、知と生命をシンボルとした水墨画

熊本大学広報誌 熊大通信 vol.67

*皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。

【発行】 国立大学法人熊本大学
〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1
Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3007
sos-koho@jim.kumamoto-u.ac.jp

【編集】 熊大通信編集委員会
大日方信春 / 委員長 大学院人文社会科学部(法学系)
茂木 俊伸 / 大学院人文社会科学部(文学系)
松永 拓己 / 教育学部
松永詩乃美 / 大学院人文社会科学部(法学系)
木村 弘信 / 大学院先端科学研究部(理学系)
川島扶美子 / 大学院先端科学研究部(工学系)
永田まなみ / 大学院生命科学研究部(保健学系)
首藤 剛 / 大学院生命科学研究部(薬学系)
田中 尚人 / 熊本創生推進機構
後藤 正三 / マーケティング推進部広報戦略室

【制作】 株式会社 談



見据えるのは、エイズの「完治」
HIVを体内から
駆逐できる時を目指して

薬学部附属 創業研究センター 藤田 美歌子 准教授

加齢による脳の病気を発症前に知る
新しいMRI解析技術を
熊本大学から世界へ

大学院生命科学研究部(保健学系) 米田 哲也 准教授
医理工学



最期まで、
明るく楽しい人生を。
鍵を握る「健康寿命」に挑む

大学院生命科学研究部(医学系) 富澤 一仁 教授
生体機能病態学講座

特集 1

挑む。

The spirit of challenge

命の質に関わる研究

多彩な学問分野で、先進的な研究が行われている熊本大学。

中でも、私たちの「命」に関わるさまざまな課題について、多くの研究者が果敢な挑戦を続けています。どうしたら健やかに、長く、生きていくことができるのか。命を奪うさまざまな病に立ち向かうことができるのか。命の質に挑み続ける、研究者をご紹介します。

トップレベルの研究で
世界を牽引する
リーダーを目指す

本学では、これまで、世界をリードする研究人材を育成するために、国際的に卓越した教育研究拠点を形成してきました。平成28年度からは、次世代医療や先進マグネシウムなどの先端的研究分野について6年計画で支援しています。

平成29年度からは、既に高い評価を受けている研究の中でも次世代の本学を代表する研究領域を「みらい研究推進事業」として、学術の既存概念や方向を変革しうる挑戦的な研究を「めばえ研究推進事業」として、支援することとしました。いずれも、将来、世界トップレベルの研究に成長させることを目的としています。

3つの支援体制により、研究の萌芽期から世界最高水準の研究まで、それぞれのステージにあわせた育成・支援を行うことができます。生命科学系や自然科学系それぞれに国際共同研究機構を組織し、国際的な共同研究も実施していきます。

「みらい・めばえ研究推進事業」の平成29年度の採択件数は、「みらい研究推進事業」が、富澤一仁教授らがすすめている「多階層的視点による老化・健康寿命を制御する機構の解明」など8件、「めばえ研究推進事業」では米田哲也准教授らの「臨床用MRIで実現可能な神経変性疾患の発症前診断を目指した白質ミエリンの定量化技術の研究・開発」など18件。採択された各研究者・研究チームでは日々、世界を視野に高い目標をもって研究をすすめています。

国際先端研究拠点 (4拠点)

～世界最高水準の
先端的・先導的研究拠点

みらい研究推進事業

めばえ研究推進事業

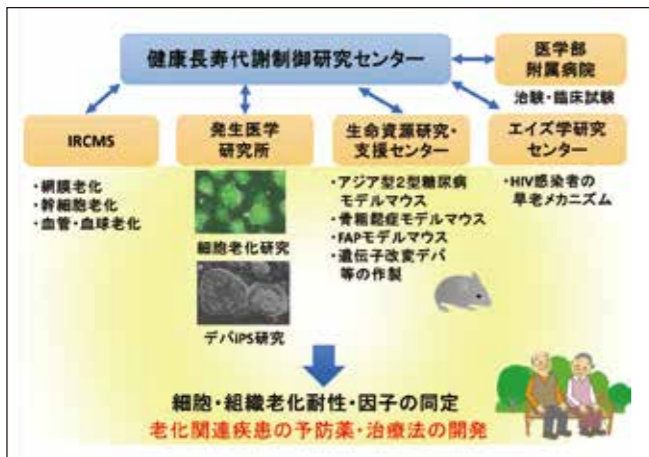
学内公募により選出

みらい: 既に高い評価を受けている研究

めばえ: 学術の既存概念や方向を
変革・転換しうる大胆で挑戦的な研究



アジア人種に多い非肥満タイプで2型糖尿病になるマウスを作り、創薬開発を行う(左:ヨーロッパ人種型(肥満タイプ)、中:アジア人種型(非肥満タイプ)、右:野生型)



健康長寿代謝制御研究センターの組織イメージ



大学院生命科学部(医学系) 富澤 一仁 教授
生体機能病態学講座

香川医科大学大学院医学研究科修了。ロックフェラー大学(アメリカ)、岡山大学を経て平成20年熊本大学へ。糖尿病等の代謝研究を通じて、老化・健康寿命を制御する分子機構の解明を目指している。

筋梗塞、失明や認知症の引き金となる糖尿病は、要介護状態となる大きな原因の一つです。日本人を含むアジア人種は、遺伝的にインスリンの出が悪い傾向があります。欧米人であれば肥満タイプの人が発症しやすい糖尿病ですが、アジア人種には非肥満タイプでも糖尿病になりやすいのです。そこへ、欧米型の食生活が入ってきて、糖尿病が増えました。熊本大学は、糖尿病などの代謝疾患に関する論文の被引用数は日本一。また、富澤教授はインスリンを出すベータ細胞を保護する薬剤を開発し、熊本大学医学部附属病院との臨床試験で治療効果も得ています。「熊本は、平均寿命は男女とも全国4位ながら健康寿命は21位。私たちが得意とする代謝医学を柱の一つに、健康寿命に取り組みのは本学の役割だと思います」。

予防・未病の視点でも 研究と人材育成を推進

「多階層的視点による」は、代謝・循環医学のほかに、認知症などを研究する脳・神経科学、緑内障などを研究する感覚・運動医学の3つの講座に所属する研究者で組織。平成29年11月には「老化・健康長寿分野」を設置して、老化しないこと注目されているハダカデバネズミの飼育・研究を行っている三浦恭子准教授を招へいしました。三浦准教授はハダカデバネズミの皮膚からiPS細胞の作成に成功し、科学技術・学術政策研究所により「科学技術への顕著な貢献2017(ナイスステップな研究者)」にも選ばれました。「本学には、血管や幹細胞

老化を研究する発生医学研究所や国際先端医学研究機構(IRCMS)、また遺伝子改変マウスの高い技術を持つ生命資源研究センターがあります。そんな研究拠点といるんことが一緒にできる。それが本学の強みです。本研究チームは、国が進める老化研究メカニズムの解明・制御プロジェクトの一員として研究を推進しています。

「健康寿命はのばせませす。限りある命をいかに楽しく明るく過ごすか。これまでこの部分に、意外と科学が取り組んでいなかったといえます。病気そのものの解明と、介護状態にならないための薬や治療法を開発するという目標のほか、予防、未病の視点でも研究や人材育成に取り組んでいくと富澤教授。「健康に死ねる」、そんな未来を創る熊本大学に、大きな期待が寄せられています」。



「優秀な人材が多く、基礎研究がさかんなのが熊大の強み」。魏范研(ウェイ ファンイエン)准教授や大学院生と共に研究を行っている

最期まで、明るく楽しい人生を。 鍵を握る「健康寿命」に挑む



長寿で病気にも強い耐性をもつ「ハダカデバネズミ」

人生の最期を寝たきりで過ごすことは、誰しも避けたいもの。

医学部の富澤一仁教授は、自力で生活できる「健康寿命」の延伸に、医学的視点から取り組みます。

要介護となる大きな原因 糖尿病の研究が柱の一つ

「日本は世界一の超高齢化社会。2050年には、65歳以上が人口の40%に達すると予測されています」。富澤一仁教授はこう切り出しました。長生きに對し不安感がぬぐえない今の日本。「日本では、自分で生活できる健康寿命と死ぬまでの平均寿命の差が男性で約9年、女性で約13年。介護がなければ生きていけないこの年数を、いかに短くするかを考えないといけません」。

そんな健康寿命に大学の医学的視点で挑む新しい研究が、「みらい研究推進事業」に採択された「多階層的視点による老化・健康寿命を制御する機構の解明」です。この研究の柱の一つが、富澤教授が専門とする糖尿病研究をはじめとした代謝・循環医学。「脳梗塞や心



既存のMRIにも活用できる解析技術を開発することで、多くの病院で活用できるようになることが目標



学会など、さまざまな機会でも技術の理解と応用の探索を進める活動を行っている。「使ってもらえるまで責任があると考えています」



大学院生命科学研究部（保健学系）米田 哲也 准教授
医用理工学

熊本大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了。平成10年熊本大学へ。県内の高校生を対象にした出前授業などにも意欲的に取り組んでいる。

「皆さんの関心が高い加齢による脳の変化。これらは私たちは神経変性疾患と呼んでおり、中にはパーキンソン病やアルツハイマー病があります。これら神経変性疾患は、脳の白質と呼ばれる部分を取り巻くミエリンがなくなること、脳内の電気伝導が弱くなります。今のところ、MRIでこの白質ミエリンがなくなっているのを見るのは無理だと思います。そこで、白質ミエリンを画像化し、かつ定量化することで測定を可能にする技術を開発することがこの研究の目的です。将来的には、一般的な健康診断にも組み入れられるようなMRIによる白質ミエリンの検査方法を確立し、予防医学の発展に寄与したいと話してくれました。」

研究成果は、広く使われてこそ意味がある

「私たちが大切に行っているのは技術の正確性と汎用性です。一部の施設でしか使えないなら意味がありませんから。すでに実用化しているSWIPは、従来のMRIで使うことが可能。米田准教授は医師らに対して新しい解析技術の広報活動にも力を入れていいます。白質ミエリンの検査方法も、どんな施設でも使えるようになることが目標だと米田准教授。「今回、新しい白質ミエリンの検査方法の開発を『めばえ研究推進事業』に選んでいただいたことはチャンスの一つ。」

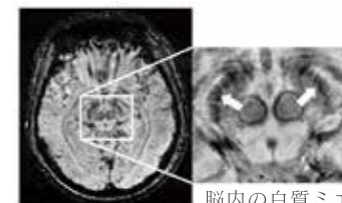
私たちはさらにその先を見据え、作るだけではなく、売ることも、そして責任を持って取り扱いを説明することも大切な仕事だと考えています。研究の成果が販売ルートに乗り、広く使われてこそ、研究する意味があると話します。

「私は熊本大学理学部出身。医学とは異文化から来ました。しかし、そこで相互作用が働いて学際研究が進み、使えると思ってもらえるものを作ることができました。今後は外部資金獲得にも力を入れ、医学や物理以外の人材も採用していきたいと考えています。地方大学でもやれるところを見せたい。私のモットーは、どこでやるかではなく、何をやるか、ですから。」



「MRI画像の見方など、学生にとって役に立つ学びの時間も重要」と米田准教授

加齢による脳の病気を発症前に知る 新しいMRI解析技術を熊本大学から世界へ

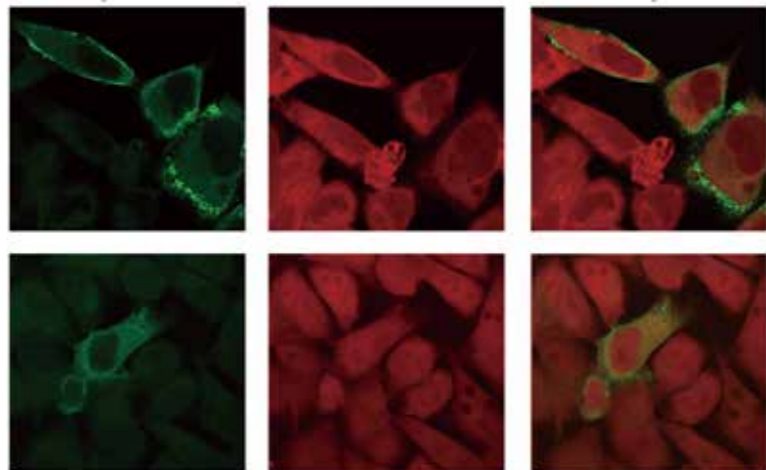


脳内の白質ミエリンを写したMRI写真

多くの人が苦しんでいるパーキンソン病やアルツハイマー病。それら脳疾患を発症前に、MRIを使って見つける新しい技術の開発に挑むのが、医学部保健学科の米田哲也准教授です

神経変性疾患にかかわる白質ミエリンの診断を可能に

医療機器の中で、近年進化が著しいのがMRI。「磁石を使うので被ばくしません。これからの医療で望ましい画像化装置と言えます」と米田哲也准教授。米田准教授が開発した、MRIで撮影された画像を解析する新しいソフトウェアは特許を取得。従来見えなかったものを見せ、また、腎障害などのリスクを伴う造影剤を入れなくても血管をはっきりと見ることを可能にし、SWIPという名前ですべて一般企業を通して流通しています。そんな実績を踏まえて、今回新しい研究として「めばえ研究推進事業」に採択されたのが「臨床用MRIで実現可能な神経変性疾患の発症前診断を目標とした白質ミエリンの定量化技術の研究・開発」です。

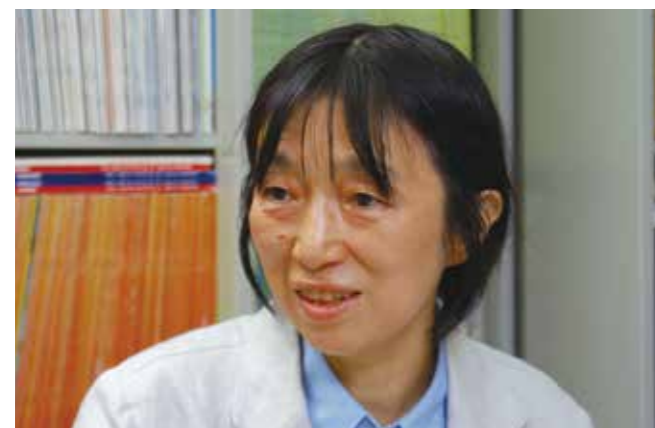


ウイルスタンパク質を緑に光らせ、蛍光顕微鏡で細胞を観察したときの写真。L-HIPPOがない場合(上)ウイルスタンパク質は細胞膜に局在するが、L-HIPPOがある(下)と細胞質に局在が変わり、やがて細胞はアポトーシス(細胞死)を起こす



エイズウイルス内のタンパク質に結合する働きをもつ L-HIPPO は、ウイルスの出芽をおさえ、感染細胞を死に至らしめる

※Scientific Reports, 平成 29 年 8 月 21 日に掲載
Hiroshi Tateishi, Kazuaki Monde, Kensaku Anraku, Ryoko Koga, Yuya Hayashi, Halil Ibrahim Ciftci, Hasan DeMirci, Taishi Higashi, Keiichi Motoyama, Hidetoshi Arima, Masami Otsuka, Mikako Fujita. A clue to unprecedented strategy to HIV eradication: "Lock-in and apoptosis".
Scientific Reports, 2017; 7 (1) DOI: 10.1038/s41598-017-09129-w



薬学部附属創薬研究センター 藤田 美歌子 准教授

京都大学大学院薬学研究科博士後期課程修了。徳島大学を経て平成18年熊本大学へ。薬学部にて、エイズに関する創薬研究に携わっている。

生き残ったウイルスを持つリザーバー細胞の駆逐が、今のエイズ治療研究の大きな課題。数年前に開発された「Kick and Kill法」は、リザーバー細胞内に潜伏しているHIVを薬剤で活性化させ、免疫システムが狙いやすくすることで感染細胞が死滅することを狙った治療法です。「ところが、感染細胞がなかなか効率的に死なないんです。私たちは今回、合成化合物「L-HIPPO」をウイルス感染細胞に入れると、ウイルスが細胞内に閉じ込められ、細胞自身が死ぬ、ということを見つめました。この化合物をウイルス活性化剤と共にリザーバー細胞に入れば、リザーバー細胞が死ぬはずなんです」。この方法は「lock-in and apoptosis法」と名付け

られ、平成29年、学術雑誌に論文が掲載されました。(※)

野心と好奇心、そして「人を救いたい」、それが原動力

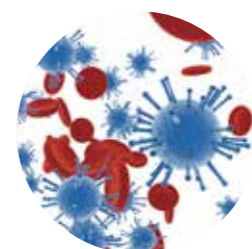
「この方法がすぐに薬として使えるようになるわけではありません。しかし、エイズ治療研究の最大の目標は、感染者体内からウイルスがなくなる完治。それに向け、大きなジャンプになると考えています」。こう話す藤田准教授が本格的にHIV研究に取り組んだのは、前任校、徳島大学でのこと。「熊本大学に来て、薬学部の大塚雅巳教授の有機合成の分野と私のHIV研究が結びついた研究が始まりました。エイズ研究は競争が激しいですが、人と違う観点でやったことで成果が出たと思っています。熊本大学は医学研究も盛ん

で、共同研究にも取り組みやすい環境だと思います」とのこと。
天然痘が撲滅されたように、エイズの撲滅に「自分の仕事で貢献したい」と藤田准教授。研究者には、そんな野心と、そして好奇心も大切だと言います。「なぜそうなるのかを知りたいという純粋な興味があります。メカニズムを解明することが結局は治療法の改良にもつながるわけですから」。感染者が薬を一生飲み続けなければならないことに加え、薬が行き渡っていない国々の問題もあります。「HIVを体内から完全に消し去ることができたら、薬を飲み続ける必要がなくなります」。野心と好奇心、そして人を救いたいという気持ち、そのすべてが藤田准教授の研究を支えています。



研究を一緒に行っている大学院薬学教育部博士後期課程3年の立石大さんと研究補助の古賀涼子さんと

見据えるのは、エイズの「完治」 HIVを体内から駆逐できる時を目指して



体内の HIV (イメージ)

1980年代初頭に初めて患者が確認された、エイズ。多くの研究者が挑み続けてきたなか、新しい治療法の開発につながる発見をしたのが、薬学部の藤田美歌子准教授です。

生き残りのウイルスを死滅させる方法を発見

エイズは、HIV(ヒト免疫不全ウイルス)への感染が原因の病気です。薬の開発前は感染が死を意味したこの恐ろしい病も、「現在、HIVの抗ウイルス剤は20種類以上。それらを組み合わせると飲む多剤併用法で、死からは逃れられる病気となりました」と藤田美歌子准教授。しかしこれは薬剤でHIVの増殖を抑える、という治療法であり、ウイルスが完全に死滅するわけではありません。「ウイルスは、リザーバーと呼ばれる細胞の中に生き残り、その間も少しは増える。それが怖いところです」。そして、薬剤耐性を持つものに変異するのもウイルスの特徴。そのため、感染者は数種類の薬を一生飲み続けなければならないのです。



保健体育
坂下 玲子 教授
Reiko SAKASHITA
教育学部
教育学部附属特別支援学校 校長

研究室探訪

子どもたちが「自分を向上できる」その自信を育む体育教育を考える



やらされるのではなく
やりたいからやる運動を

積極的に体を動かすことは、成人した後の健康づくりに大きく影響します。小・中学校時代に運動が楽しいと思えるか否かは、その後の人生にも大きくかわると言えます。それでも、体育は苦手と思う子どもが少なくないことも事実です。

「私の研究は、小・中学校におけるより良い体育授業をつくること。子どもたちが主体的に体育に取り組むことをねらいとして、教材や指導法などを考えます」。こう話すのが保健体育科教育を専門とする坂下玲子教授です。「主体的に」というのは、子どもたちがやりたいからやる、と思えること。ユネスコの定義では、スポーツには遊びの要素が含まれる、とあります。授業でもやらされるのではなく、遊びと同じように、やりたいからやる運動との出会いをつくっていく。先生がきっかけや、ポイントごとに方向性を示し、その中で子ども

もたちが自分で試行錯誤しながら、それまでの自分よりちょっとでもうまく何がができるようになった、そんな新たな自分との出会いを子どもたちが得られることが目的です。

競争相手は昨日の自分 試行錯誤が大切

具体的な例として、現在学生が卒論で研究している熊本大学教育学部附属小学校の先生の授業づくりを教えてくださいました。「サッカーは、三次元でボールが動くので、普段やらない女の子などには難しいスポーツです。そこで先生が教員を工夫して、ドッチビーを2枚合わせたような円盤型のボールにしました。すると地面をすべるだけなので蹴りやすく止めやすくなるわけです」。スポーツをそのまま与えるのではなく、教材や指導法を工夫することで、まずは誰もが取り組みやすくなります。個人差の大きい短距離走などは、「人と競うのではなく、自分の記録にチャレンジします。記録

をもう少し縮めるためにはどうすればいいか、自分で試行錯誤したり、あるいは友だちに協力してもらったり」。子どもたちには、体育を通じて社会性を身に付け、さらに試行錯誤する楽しさ、工夫する楽しさを知ってほしいと坂下教授は話します。

自分が変わることを実感しやすいのも「体育の良さ」と坂下教授。「学生たちには、先生になった時、子どもたちとしっかりかかわって観察し、ちょっとでも伸びたらほめてあげることを大切にしてほしい。それができるのも体育のいいところですから。先生が子どもたちと一緒に活動し、「コミュニケーションがとりやすい科目です」。そんな子どもたちとのコミュニケーションは、「私より学生たちのほうが上手。子どもたちとすぐに仲良くなります」。坂下教授も、学部生との授業で学生たちと一緒にやって思い切り体を動かします。終始はじけるような笑顔で誰よりもはつらつとしている姿が印象的。「私自身、学生と一緒にやるということが本当に楽しいと思っています」。

密着！坂下研究室



附属特別支援学校小学部の授業「大学の名人さん」で、ゼミ生がリーダーとなって運動遊びの指導を行います



毎年ダンスを創作し、保健体育科学生全員で発表会に出場します。平成26年度作品「う！ごき！だ！せ！」

lab's data

【教育学部 保健体育】

□修論・卒論テーマ

- ・中学校保健体育科授業におけるメタ認知育成の事例研究
- ・中学校保健体育科における協同学習の効果に関する研究
- ・熊本県中学校におけるダンス授業についての研究—中学校教員を対象とした調査に基づいて—



□メンバー

学部4年生6人、3年生5人、大学院教育学研究科3人

Interview



教育学部小学校教員養成課程4年

ふくなが りお
福永 里桜さん(左)

坂下先生がやさしいこと、そして女性の先輩が多かったこともあってこの研究室を選びました。人数が多くて、楽しい研究室です。坂下先生は特別支援学校の校長先生もされているので、支援を要する子どもへの指導法など勉強になることが多いです。体づくりの領域についても詳しく知ることができました。

私は子どもが大好き。毎日子どもたちと一緒にいられるって幸せだと思って小学校の教師を目指しました。現在は卒論準備中。私のテーマは「子どもの運動スポーツ行動に親が与える影響について」です。授業というよりは子育ての目線で研究に取り組んでみたいと考えて選びました。

教育学部中学校教員養成課程保健体育4年

なかが ひとみ
中川 瞳さん(右)

体育が一番得意で、特に水泳をずっとやっていて大学でも水泳部だったので、主専攻に体育を選びました。坂下先生は学生にやりたいことをやらせてくれる先生。卒論のテーマも自由で、やりたいものを選びみんなで話し合い、先生がアドバイスをくださる、そんなスタイルの研究室です。私の卒論研究は「着衣泳について」。来年から小学校の現場に入るので、少しでも仕事につなげられと思っています。

小学校の先生になったら、体を動かすことを楽しいと思ってもらえる授業づくりをしたいと思っています。今は競争競争という体育ではないので、子どもたちが、自分がチャレンジしてできるようになった、という思いを積み重ねてもらえるような体育の授業をしていきたいと思っています。

大正12年の五高七高対抗戦野球試合



熊大・鹿大広報誌合同企画

五高×七高 変わらぬ絆が、 今も、ここに。

明治に創設された伝統の「ナンバースクール」、第五高等学校（現：熊本大学）と第七高等学校（現：鹿児島大学）。

今回、熊本大学の広報誌「熊大通信」と鹿児島大学の広報誌「鹿大ジャーナル」では、初の合同企画を実現。今後のさらなる交流につなげます。

（※「鹿大ジャーナル」では3月号に合同企画を掲載予定）



平成29年11月4日に行われた五高七高野球定期戦

五高×七高 競い合い、高め合いの歴史

九州のナンバースクールとして、旧制高等学校時代から、さまざまな形で交流を重ねてきた熊本大学と鹿児島大学。これまで、どのような交流があり、今後、どのように連携していくのかを紹介します。

交流戦中止の原因となった？ 五高・七高の応援歌

大正15年の中止に至ったのは、七高応援団が五高寮歌を揶揄した替え歌を歌ったことで騒ぎが起こったことが原因とされています。
応援歌への思いの強さが感じられるエピソードですね。

五高の応援歌

五高寮歌

武夫原頭草萌えて
花の香甘く夢に入り
龍田の山に秋遊いて
雁が音遠き月影に
高く響ゆる三寮の
歴史やうつる十四年

五高で詠われる「武夫原」は松林に囲まれた体操場で、現在もこの場所はグラウンドとして使われています。

七高の応援歌

北辰斜めに

北辰斜めにさすところ
大瀛の水洋々乎
春花薫る神州の
正気はこもる白鶴城
芳英永久に朽せねば
歴史もふりぬ四百年

七高の「北辰」とは北極星、七高のあった鹿児島が北極星が斜めに差し込む南の地である、と詠っています。

スポーツで、演説で。
五高、七高、交流の伝統

五高と七高の交流の中心になったのは、両校の学生自治会だった五高龍南会と七高校友会でした。両校の間では、毎年、野球と陸上競技の対抗戦や連合演説会が行われていました。全学をあげての一大行事で、それぞれの市民にとっても大きな楽しみの一つでした。

だが、大正15年、熊本で開催された野球対抗戦後、双方の応援団の間に小競り合いが生じ、以降、中止されました。

ただ、野球については、戦後、20年ぶりに五高七高野球戦が復活し、両校の関係者の熱意と努力で継続されています。

いまに繋がる交流
熊大と鹿大の連携で
未来の学びを充実！

南九州プラットフォームに関する協定を締結！

熊本大学教育学部と鹿児島大学教育学部では、連携して「南九州プラットフォーム」を設置する協定を平成29年10月26日に締結しました。南九州プラットフォーム設置により、(独)教職員支援機構が実施する現職学校教員向けの研修を、熊本県、鹿児島県で開催できるようにします。

また、研修テーマに南九州地区が抱える教育課題（へき地、離島、複式学級、小規模校における支援など）を加えることで、学校教員が身近な課題を解決するための研修を展開することもできるようにします。さらに、両大学に開設される、教職大学院のカリキュラムを相互に活用することで、院生の学びの充実も期待できます。

未来へつながる学びの場を作ろうとする熊大と鹿大。地域の問題を解決する大学の役割が大きくなっていきます。

学生企画

つながろう！熊大・鹿大！

私たちが取材しました！
熊本大学硬式野球部

明治39年に始まり、111年の交流を
今につなげる熊大・鹿大野球定期戦。参加した
現役とOBの皆さんから、一言いただきました！



(左) 主務 教育学部3年 太田一成さん (右) マネージャー 教育学部3年 香山朔子さん

伝統の影にある 効率的な運営



熊本大学硬式野球部副主将 理学部3年
安武 寛紀さん

「111年続くというのは、選手はもちろんのことですが、運営が効率的に仕事を行うことによって守られ続けた部分もある」と、今回の交流戦の運営を行って安武さんは感じたとのこと。「球場・審判の手配からOBへの連絡、お弁当の準備など、自分はやっていないが大変そう」と話します。それでも、同じ野球をしている仲間同士、交流を深められるよう、交流を続けていきたいそうです。

懇親会での交流も 貴重な機会



熊本大学 OB
松村 邦明さん (60)

熊大硬式野球部のOB会「熊硬会」で会長を務めている松村会長。定期戦について「正直試合のことはあまり覚えていないが懇親会での交流は毎回毎回が楽しみ」と語ります。定期戦を終えた後は熊大・鹿大の交流を深めるため懇親会を行います。ここでの繋がりは野球外の部分でも大いに助けられているそうです。「熊大・鹿大が現在も定期的に交流を行っているのは硬式野球部だけ。現役生にはこれからも受け継いでほしい。もちろん懇親会や応援歌（エール）の交換も（笑）」。

伝統を熊大と共に



鹿児島大学硬式野球部主将 工学部3年
奥 将臣さん

「熊大は人数が多くいいピッチャーが揃っており勉強させてもらっている」と話してくれた鹿大主将の奥さん。この定期戦は111年の長い伝統があり、全国を見ても数少ない伝統の一つであると思うのでしっかりと引き継いでいきたいとのこと。「自分がOBになったら積極的に参加して元気なプレーをいくつになってもしたい」と定期戦への思いを話してくれました。

111年の伝統を 次世代へ



鹿児島大学 OB
加藤 正徳さん (75)

「定期戦は自分たちの頃も行っていたが記録などを残すというよりは楽しんで行っていた」と語る加藤さん。明治39年から111年の伝統がある熊大・鹿大定期戦だが、当初は宮崎大も参加していたといいます。昔は完全試合をさせられるなど、苦い経験もあるそうですが、今はOBとして中心になって参加しています。「111年の伝統の重みを現役生には感じてもらいつつ、次世代にも繋げてほしい」と語っていただきました。

熊本地震で熊本大学を支えた鹿児島大学

平成28年4月に起こった熊本地震。被災した熊大生を
鹿児島大学が支援してくれました。

図書館で、講義で。 鹿児島大学が学生の学びを支援

熊本大学法学部法学科3年 黒岩 優里香さん

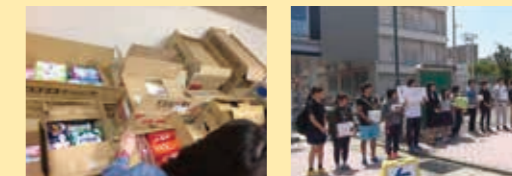
鹿児島大学では、熊本地震で休講中の熊本大学の学生・教職員を対象に、附属図書館の利用や法学部授業の聴講で支援。これを利用した鹿児島出身の黒岩さんは「鹿児島の実家に避難中に、鹿児島大学の図書館が利用できるという連絡をもらいました。休みの間の遅れを少しでも取り戻したくて利用しました。いつもと違う講義が受けられたのも貴重な体験」と当時を振り返ってくれました。



熊本出身者のつながりで 鹿大内で義援金を集めました

鹿児島大学法学部経済情報学科3年 馬本 寛子さん

馬本さんは熊本県立済々堂高等学校出身。熊本地震の際、鹿児島にいた馬本さんは、「大好きな熊本のために何かしたい！そして、一刻も早く復興してほしい」と4月21〜29日に鹿大内で募金活動を行いました。済々堂出身者のネットワークやTwitterの呼びかけで有志が、総勢で118人集まりました。集まったお金は、義援金送金や支援物資の購入にあて、熊本大学を支援してくれました。



熊大・鹿大 OB・OG 母校自慢！

なんと、鹿大には熊大OGの職員が、そして、熊大には鹿大OBの職員が、それぞれ勤めているのを発見！両方の大学をよく知っているからこそわかる、母校の魅力を教えてもらいました！

鹿大 OB

地域性を活かした研究がある鹿大！
共に過ごした研究室のメンバーと
今もつながっています。

熊本大学運営基盤管理部人事課
(鹿児島大学農学部・生物資源化学科(現:食料生命科学科)卒)
吉嶺 良平さん



魅力

「焼酎学」など地域性を 活かした特色ある研究

鹿児島大学には、鹿児島ならではの特色ある研究がたくさんあります。その一つ、私がいた学科にある「焼酎学コース」では、キャンパス内の蔵で焼酎製造が行われていました。

私がいた学科では3年次後期より研究室に配属になり、卒論テーマに沿って実験をすすめました。思い通りにならないことばかりの日々でしたが、最後に論文にまとまったときの思いはひとしおでした。当時のメンバーとは今でも連絡をとりあっています。

熊大 OG

多彩な考え方が学べた熊大！
今も役立つ経験ができました。

鹿児島大学法学部専門職大学院係
(熊本大学文学部総合人間学科卒)
畑中 理沙さん



魅力

多彩な考え方が学べる 教育体制

2年生のときに受けた講義で、物事を多角的な視点で考える面白さを知り、最初に思っていたのと別のコースに進みました。ぜひ、色々なことに挑戦してみることをおすすめします。

大学時代は、弓道部の活動に打ち込みました。なかなか上達せず苦しい思いもしましたが、4年間続けたことで、自分の弱点への対処法や、課題に対して粘り強く取り組む姿勢を身につけられたと思います。

文学部 熊本地震を経験し インフラという職業の責任を実感



田邊 史帆
Shiho TANABE

西部ガス株式会社
熊本支社
営業部お客様サービスG

文学部総合人間科学科
平成26年度卒

平成5年生まれ、大分県国東市出身。大分県立杵築高等学校卒業。自然豊かな農地でのびのびと育ち、熊本大学へ。趣味は国内外問わず旅行をして、日常とは異なる空気に触れること。

熊大のココがイイ！

自然豊かで歴史があり、新しくなった図書館もきれいで快適です！

将来の夢は大学で経験を積んでから そんな風に考えていた高校時代

将来の夢は特にな、いまだき？の高校生でした。やりたいことが見つからないからといって焦っていたわけでもなく、大学でいろんな経験を積んでから将来の夢を見つけようと考えていました。大学の分野について調べている中で人間の心理や行動について学びたいと思い、熊本大学受験を決めました。

学生寮の集団生活で さまざまな価値観に触れ成長できた

大学4年間を学生寮で過ごし、集団生活でさまざまな人の生活や価値観に触れたことで、自分を成長させることができたと感じています。また、自分がやってみたくと思ったことには積極的に挑戦し、ドイツへの短期留学やアルバイトなども行いました。専攻の学問はもちろんですが、時間の使い方を自分で決められる「大学生生活」をたっぷり満喫しました。

復旧の最前線に立って お客様の安全確保に努めた熊本地震

西部ガス株式会社に就職し、熊本支社に配属され現在3年目が経とうとしています。入社2年目には熊本地震を経験し、復旧の最前線に立ってお客さまの安全確保に努め、インフラという職業の大変さと大切さを実感しました。現在は、西部ガスショールームヒナタ熊本に配属され、ガス機器のご紹介やご来場促進のイベント企画などを行っています。

医学部 現象から真因を考察・追究。大学院で 学んだメソッドを新薬開発に活かしたい



西岡 和輝
Kazuki NISHIOKA

株式会社新日本科学
安全性研究所(鹿児島県)

医学部保健学科
平成25年度卒
大学院保健学教育博士前期課程
保健学専攻
平成27年度修了

平成3年生まれ、熊本県熊本市出身。熊本県立済々堂高等学校卒業後、熊本大学を経て大学院へ。さまざまなことにアンテナを広げ、興味が向けばやってみる性格。趣味は料理。

熊大のココがイイ！

人と環境に恵まれて、何にでも挑戦できるところ。

高校時代のケガをきっかけに さまざまな医療の仕事を知った

中学生の頃から命の現場に興味があり、漠然と医療従事者に対するあこがれを持っていました。高校生の時、部活で膝をケガしたことがさまざまな医療の仕事を知る機会となりました。病院で働く方々を見て誰かの健康の一助になり、その人やその周囲が笑顔になれるような仕事をしたいと考えていました。

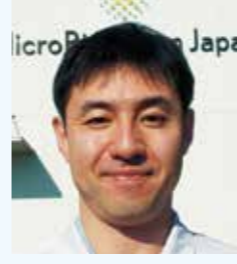
バイトや趣味で学外にも 交友関係が広がった大学時代

2年生までは勉強、バイト、サークルも平均的にこなしていたように思います。3年生以降は実習も多くなり、サークルにはあまり顔を出さず勉強とバイトに追われる日々でした。学生時代を通して、学内の交友だけでなくバイトや趣味の関係などで学外の人たちとの交友も広がられました。

薬の副作用にかかわる実験に従事 経験を積んで評価を行う立場に

大学卒業後は、縁あって大学院に進学しました。大学院では研究を通じて現象から真因を考察、追求することの意義、メソッドを学びました。現在は新薬の開発の一部である毒性(副作用)についての実験に携わっています。まだ経験不足で技術者としての業務が多いですが、今後、実験の評価を行う立場となった際には大学院で学んだ考え方を活かしていきたいと考えています。

薬学部 大好きな微生物にかかわり、 人の役に立つ新しいものを生み出す



土井 理
Satoru DOI

日本マイクロバイオファーマー
株式会社 信頼性保証部
八代QAグループ長(熊本県)

薬学部薬科学科
平成12年度卒
大学院薬学研究科博士前期課程
薬科学専攻
平成14年度修了

昭和53年生まれ、福岡県福岡市出身。福岡県立新宮高等学校卒業。微生物(発酵)の仕事をしたくて、大型発酵槽を持つ当社に入社。趣味はスポーツ全般(特にサッカー)、旅行(グルメ+温泉)、おいしいお酒。

熊大のココがイイ！

先生、先輩、後輩、みんな家族のような雰囲気の中、自分の夢を育てられます！

薬剤師だった祖父の 姿にあこがれた幼い頃

薬剤師である祖父が、調剤室で薬を調合している姿は、幼心に「格好いい!」と思っていました。また、幼い頃は病弱で、抗生物質によくお世話になっていたこと、人の役に立つ新しいものを生み出す仕事をしたかったことから、進路を真剣に考えた時に、自然と「薬学の道に進みたい!」と思うようになりました。

自分がお世話になっていた抗生物質は 微生物が生み出していた!

薬学部はアットホームな環境で楽しい毎日でした。特に、サークルの先輩や友人とは夜遅くまで飲んで語り「自分という人間」を見つめ直し、成長させることができました。そんな中、自分がお世話になっていた抗生物質は微生物が生み出していたと知り、「今度は自分が微生物を使って恩返しする番!」と確信しました。

若いうちから責任ある仕事を させてもらえる会社で日々精進

私の会社は熊本県(八代市)にも拠点工場を構え、微生物の多彩な力を最大限に生かし、世界中の人々に豊かな暮らしを届けています。入社当初は微生物の新機能の研究を、現在は出来上がった製品の品質保証と、いろいろな形で大好きな微生物にかかわっています。若い頃から責任ある仕事を任せてもらえる会社の中で、広い視野を持ってさまざまな業務に臨むよう精進しています。

理学部 船舶の航行安全を守るため 海洋調査をもとに海図を作製



橋本 崇史
Takafumi HASHIMOTO

第十管区海上保安本部
海洋情報部(鹿児島県)

理学部地球科学科
(現・地球環境科学科)
平成17年度卒
大学院自然科学研究科博士前期課程
理学専攻
平成19年度修了

昭和58年生まれ、佐賀県吉野ヶ里町出身。佐賀県立鳥栖高等学校卒業。熊本大学・大学院を経て海上保安庁海洋情報部へ。趣味は読書と山登り。

熊大のココがイイ！

尊敬できる先生と一生の友人に出会えたこと。

化学や物理、生物学も扱う 複合分野である地球科学に魅力

自然に囲まれた環境で育ったこと、高校生の時に化学や数学が好きだったことで、科学者か理科の先生になりたいと思っていました。大学の専攻として地球科学科を選んだのは、地球科学が化学や物理学、生物学などを扱う複合科学でもしろうだと思ったことと、身近な自然をそのまま科学として扱うことに魅力を感じたからです。

地質調査や野外調査で過ごす 同級生との時間が楽しかった!

地球科学科は、1年生から地質調査や野外調査などがあり、学校内外で同級生と過ごす時間がとても長く楽しかったです。研究室に配属されて以降は、担当教員の指導のもと、学内だけでなく国内のほかの研究施設等での実験や、国内外での学会発表など、さまざまな経験をさせてもらいました。

大学時代に培った知識が役立つ 海洋権益の保全にも重要な海洋調査

現在は、海上保安庁海洋情報部という部署で海洋調査を通じて船舶の航行安全を守るための海図を作製する仕事をしています。日本は島国であるため、経済やエネルギー等の安全保障上海運の役割は重要です。また、近年は我が国の海洋権益の保全という観点からも海洋調査の役割は大きく、大学生時代に得た地球科学の知識が役に立っています。

法学部 銀行営業店勤務を経て経営企画部へ 経営戦略や事業計画立案を担当



増田 直哉
Naoya MASUDA

株式会社
九州フィナンシャルグループ
経営企画部
シニアマネージャー
(熊本県)

法学部法律学科
平成7年度卒

昭和49年生まれ、熊本県御船町出身。熊本県立東稜高等学校卒業。平成8年株式会社肥後銀行に入行。平成28年7月より、株式会社九州フィナンシャルグループへ出向。妻と息子2人の4人家族。趣味は、ゴルフ・マラソン・ポウリング。

熊大のココがイイ！

地元の優良企業や官公庁などを中心に尊敬できる諸先輩方が多くいらっしやること。

影響を受けやすかった子ども時代 弁護士、検事、そして金融に興味

幼少の頃から、外部の影響を受けやすい性格でした。テレビドラマの影響から、高校1年生の頃は、弁護士や検事になりたいと考えていましたが、高校2年生の頃には、別のドラマの影響で金融を通じて地元貢献できる銀行員になりたいと思うように。これが、今の仕事に繋がっていると思っています。

楽しい毎日を送りつつ、 就職を考えて資格試験にも挑戦

特にサークル等には所属していませんでしたが、バイトの仲間たちとドライブや旅行に行ったりする楽しい毎日を送っていました。一方で、目標としていた銀行への就職に少しでも有利になるよう、2~3年生の時に、宅建等の各種資格試験にチャレンジするなど、自己啓発にも取り組んでいました。

現在出向中。会社法や銀行法と 格闘する毎日

平成28年7月に、肥後銀行から出向という形で、現在の勤務先で仕事をしています。もともと銀行の営業店での経験が長かったのですが、今は経営企画部として、日々会社法や銀行法などと格闘しながら、グループの経営戦略や事業計画の立案、取締役会等各種会議体の運営、資本政策等の検討といった業務に携わっています。

工学部 高専時代から学び続けた金属材料 専門知識を活かし、軸受材料を開発



池上 麻子
Asako IKEGAMI

大同メタル工業株式会社
(愛知県)

工学部マテリアル工学科
平成24年度卒
大学院自然科学研究科
博士前期課程マテリアル工学専攻
平成26年度修了

平成3年生まれ、佐賀県鳥栖市出身。久留米工業高等専門学校を卒業後、3年次編入で熊本大学工学部マテリアル工学科へ入学。趣味はライブに行くこと(愛知県は、いろんな場所へ行きやすいのでうれしいです)。

熊大のココがイイ！

自然溢れるキャンパス。とても良い環境で研究ができたと思っています。

難しい反面、 とても奥が深い金属材料

私は普通高校ではなく、工業高等専門学校(高専)という5年制の学校出身で、高専時代から金属材料に関する勉強をしていました。具体的にこんな仕事がしたい!という思いはありませんでしたが、金属材料はとても難しい反面、非常に奥が深くておもしろいと思うことも多く、将来はこの専門知識を活かせる仕事に就きたいと考えていました。

多くの時間を過ごした研究室 人に恵まれたことに感謝

部活やサークルには入っていなかったのですが、研究室で過ごすことが多かったです。研究室では先生、先輩、同期、後輩すべてに恵まれ、とても楽しく過ごせました。特に行事の多い研究室だったので、毎月の飲み会や、キャンプ、旅行など研究室のみならず過ごした時間はいい思い出です。

ものの性能を大きく左右する 回転するものには不可欠な軸受

現在は、大同メタル工業で軸受材料の開発業務を行っています。「軸受」は、回転するものには必要不可欠とされる部品で、たとえば自動車1台だけでも100個以上の軸受が使用されています。見た目は小さいですが、「ものの性能を大きく左右する」ととても重要な部品です。これからもより良い軸受材料の開発に努めていきます。

卒業生 ジャーナル GRADUATES' JOURNAL

大学の卒業生たちの今に迫る「卒業生ジャーナル」。熊本市内はもとより、国内外で活躍している先輩たちの様子を、これまでの歩みや苦勞、そして喜び、楽しみなどを通してご紹介します。

教育学部 日々成長する子どもたちの姿に 「この仕事でよかった」と実感!



安倍 堅介
Kensuke ABE

和水町立三加和小学校 教諭
(熊本県)

教育学部小学校教員養成課程
平成27年度卒

平成5年生まれ、熊本県熊本市出身。私立熊本学園大学付属高等学校から熊本大学を経て、熊本県教職員へ。夢は子どもに夢を与えられる教師になること。そのために日々学び続けています。趣味は愛車カワサキZ1でのツーリング。

友人や先生に恵まれ 教師になる夢を抱く

私はこれまでに小・中・高校と友人や先生方に恵まれ、充実した楽しい学校生活を送ることができ、一生学校に携わっていたと思っていました。そんな気持ちもあって、教師になりたいという夢を常に持っていました。

やりたいことがやれた4年間 教育について語り合ったことも思い出

とにかく自分がしたいことをさせてもらった4年間でした。親友とリュックサッカーついでバイク旅にでかけたり、好きな野球のサークルで楽しい時間を過ごしたりしました。3年次からは教育実習が始まり、授業や子どもとの関わり方について指導教員や友人たちと熱心に語り合ったこともいい思い出です。

人のためになる行動を 子どもたちと増やしていく

昨年初めて学校現場に入り、担任を持たせてもらいました。すべてのことが初めてで、同僚の先生方のサポートをいただきながらなんとか1年間を終えることができました。現在は小学5年生の担任。昨年度からの持ち上がりということもあって、子どもたちは自分の気持ちを正直に私に話してくれます。最近は人のためになる一流の行動を学級内で増やすことに一生懸命取り組んでいます。日々成長していく子どもたちの姿を見ていて、この職業で本当によかったと感じています。

熊大のココがイイ!

同じ志を持つ一生の親友が
できるところです。

REPORT 工学部創立120周年記念行事を開催しました

11月4日(土)、工学部は、「熊本大学工学部120周年 復興と展開 ～夢 それを紡ぐ絆～」をスローガンに創立120周年記念行事を開催しました。

11月4日は、文部科学省・熊本県・熊本市のご臨席を賜り、同窓生を中心に工学部関係者約500名が参加。記念式典・記念講演に加え学科ごとの行事の後、記念祝賀会を

行いました。震災の影響が色濃く残るものの、黒髪南キャンパスが力強く復興しつつある姿を多くの参加者にご覧いただく貴重な機会となりました。また、同窓生を中心に、工学部の更なる発展を期待する熱いエールをいただきました。今後も同窓会組織である熊本大学工業会との連携をさらに強く工学部の発展に邁進いたします。



工学部応援団による演舞

REPORT 第1回 IROASTシンポジウムを開催しました

11月14日(火)、本学国際先端科学技術研究機構(IROAST)は第1回IROASTシンポジウム「Plant Cell and Developmental Biology: Approaches to Multiscale Biosystems」を開催しました。

IROASTでは4つの重点的な研究領域を設定しています。今回、その一つである「先進グリーンバイオ領域」の体制が整ったことから、この分野で活躍する世界一線級の研究者を国内外から招き、国際シンポジウムとして開催しました。

当日は海外ゲストとしてミシガン州立大・カリフォルニア大デービス校・ローザンヌ大・中国科学院の4名、国内ゲストとして東北大・名古屋大・奈良先端大の4名、さらにIROAST教員3名を含む本学の研究者6名が最新の研究成果をもとに講演を行いました。また学内外の研究者と本学学生によるポスターセッションでは、招待講演者も交えて白熱した議論が交わされました。総勢約80名が参加する盛況な会で、植物科学の最先端を肌で感じる貴重な機会となりました。

IROASTは今後も同様な活動を通して自然科学分野の研究力を一層強化し、世界をリードする新たな研究の展開を目指します。



講演する海外ゲスト



集まった発表者らとの集合写真

INFO 埋蔵文化財調査センター特別展示を開催中です

大学構内遺跡の発掘成果を公表する特別展示「生活道具は変わらない？」を開催します。縄文時代から近代までの生活道具の変化と共通点を実感できます。

【開催日時・場所】
熊本大学埋蔵文化財調査センター
平成29年12月1日(金)～平成30年4月27日(金)午前9時～午後5時
※土、日、祝日、12月28日～1月3日は休み
【参加対象者】
どなたでも(申込み不要・入場無料)

【問い合わせ先】
熊本大学埋蔵文化財調査センター
TEL:096-342-3832
【URL】
http://www.kumamoto-u.ac.jp/organizations/maibun



INFO HIGOプログラムインターンシップ研究活動報告会を開催します

社会で即戦力となる医学・薬学の博士を育成する大学院プログラム。学生・修了生・教員が最先端の研究やインターンシップの成果、キャリアパスを発信します!

【開催日時・場所】
平成30年1月16日(火) 13:30～16:50
熊本大学工学部百周年記念館
※本荘・大江地区より送迎バス運行!
【参加対象者・申込方法・参加費】
どなたでも・事前申し込み不要・参加費無料

【問い合わせ先】
生命科学系事務課
リーディングプログラム推進チーム
TEL:096-373-5006
E-Mail: higo-program@jimu.kumamoto-u.ac.jp
【URL】
http://higoprogram.jp/
https://www.facebook.com/higoprogram.jp



INFO 体験講座「遺伝子と仲良くなろう」を開催します

遺伝子組換え技術や遺伝子組換え生物に関する講義、およびプラスミドによる大腸菌の形質転換等の実習を行うと同時に、生命倫理を含めた生命科学の最先端の話も提供します。

【開催日時・場所】
平成30年3月3日(土)～4日(日)
熊本大学生命資源研究・支援センター
遺伝子実験施設 6階
【参加対象者】
中学生以上(定員:20名)2日間参加できる方
【申込方法・参加費】
URLをご確認ください(参加費無料)

【問い合わせ先】
生命資源研究・支援センター
遺伝子実験施設
TEL:096-373-6501
FAX:096-373-6502
E-Mail:GTC@kumamoto-u.ac.jp
【URL】
http://gtc.egt.jp/identshi/view/exp/rikai2017



REPORT 夢科学探検2017「理学部探検・工学部探検 もの・クリ CHALLENGE」を開催しました

10月28日(土)に、25回目となる夢科学探検2017が熊本大学黒髪南キャンパスで開催されました。一般市民向けのイベントで、各研究室などから約100件の演示実験が行われました。当日は、1,500名を超える来場者があり、1日中、さまざまな実験を楽しむ人で賑わいました。屋外スペースでは、ソーラーカーの展示や、水遊びを通して物理の現象を学ぶ体験型学習

のコーナーが人気で、不思議な現象を体感しながら子どもたちが学んでいました。研究等の実験室には、KUMADAIマグネシウムに触れて実感できるコーナーのほか、光や磁石を使った実験など、暮らしに役立つ知識を学ぶコーナーが人気でした。科学の面白さに触れた子どもたちの笑顔が印象的な1日になりました。



REPORT 「VRで学ぶ認知症のこと」を開催しました

10月29日(日)に『百聞は一見にしかずーVR(バーチャルリアリティ)で学ぶ認知症のこと』と題し、VR認知症セミナーを熊本大学医学部保健学科講義室で実施しました。参加者は合計70名と、熊本県内の高校生、大学生、地域住民、専門職など多くの方にご参加いただきました。

VR認知症コンテンツは、株式会社シルバーウッド社が作成したものです。認知症の症状のひとつである空間認知障がいや幻覚、若年性アルツハイマー型認知症と診断された丹野智文さん自身の体験を、参加者にVRで体験してもらいました。今回講座のグループワークファシリテーターは、熊本大学学生や熊本保健科学大学学生らが「認知症になっても安心してらせるまちづくりに貢献する」をコンセプトに活動を行っているOrange Projectの学生たちが担当しました。「認知症当事者として生じる感情」に焦点を当て、体験から得た学びを共有し深められるよう促しました。

体験後の参加者は、「認知症の人がいたら『何かお困りのことがありますか?』と声をかけたい」、「認知症になりたくないと思うのではなく、なっても生きていける社会があることを広めようと思った」と語っていました。日本において、認知症に罹患する人は2025年には700万人にのぼると推計されています。今後も、認知症になっても安心してらせるために一人一人の認知症への正しい理解とあたたかいまなざしが広がるよう地域貢献事業を展開していきます。*Orange Projectは国際ソロプチミスト熊本-さくらより平成29年度学生ボランティア賞を受賞いたしました。



REPORT 本学学生が全日本大学駅伝に出場しました!

11月5日(日)、名古屋市熱田神宮と伊勢市伊勢神宮間106.8kmをつなぐ全日本大学駅伝が開催され、5区(11.6km)で古川大晃さん(教育学部3年)が出場しました。

全日本大学駅伝は昭和45年から開催されている歴史ある大会で学生日本一を決める大会。昨年は全日本大学駅伝九州地区予選会において個人総合3位と、あと一步のところでお出場を逃していました。今回は個人総合2位に入り、全日本学連選抜チームのメンバーとして本大会への出場を決めました。

本大会では5区を任せられ、27チーム中12位、チーム順位は17位相当という結果。古川さんは「昨年はあと1人及ばず、悔しい思いをしました。今回は初の本戦出場を決めることができ、箱根駅伝常連校の選手たちにも対抗することができたことを本当に嬉しく思います。

親身になって応援、支援してくださった方々のおかげで初めての全国レベルの大会で力を発揮できました。本当に感謝しています。4区の選手から襷を受け取った時、前の選手が少し遠く感じて苦しい走りとなりましたが、後半は沿道いっぱいのお応援や支えてくださっている人たちのことを思い直して調子を取り戻すことができました」と感謝と喜びを語りました。

今後は「九州学生駅伝の区間新記録や熊本城マラソンでの優勝に向けて練習していきたいと思います」と日々努力し、成長していきたいという前向きな姿勢を見せてくれました。



REPORT 菊池恵楓園にて、教育学部学生による彫刻の除幕式が行われました

11月1日(水)、熊本県合志市にある国立ハンセン病療養所菊池恵楓園にて「型取りの手のブロンズ《生きた軌跡》及びモニュメント《明日に生きる》」の除幕式が、行われました。

これらの彫刻は教育学部・緒方信行教授指導のもと大学院生の岩間美咲希さん、田中悠里恵さんが制作にあたりました。

《生きた軌跡》は入所者の杉野芳武さん佳子さんご夫婦の手を型取った2つのブロンズ像で、さらに、お二人の手をもとにハンセン病と闘ってこられた方々の思いをイメージしたモニュメント《明日に生きる》も制作。マスコミ各社が多数訪れて、これまでの取り組みをまとめたミニ番組も熊本県民テレビ(KKT)「テレビタミン」にて放映されました。

ハンセン病は後遺症で顔や手足が変形するなどし、偏見と差別を招きました。院生2人は「ハンセン病の歴史について改めて学び、桂子さんと芳武さんと出会うことができたことは大変意味のあるものだったと感じています。これからの社会を担う子供たちに、苦難の道を強く歩いてこられたたくさんの方々の思いと正しい知識を少しでも届けられればと思います」と話しました。



除幕式の様子



型取りの様子

熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

№4 0（平成29年8月1日～平成29年10月31日）

卒業生の皆様、在学生の保護者の皆様、法人・団体等の皆様、本学の退職者及び教職員の皆様から、これまでに約13億4640万円（平成29年10月31日現在）のご寄附をいただき、研究・教育に資する事業に取り組みさせていただきました。また、平成28年の熊本地震復興事業基金へのお寄せいただきました寄附金は、熊本大学の復興に向けて、被害学生へ対する修学支援や被災しました建物の修繕費、設備・機器の更新・修理費のために、大切に活用させていただきます。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

今号では、平成29年8月1日から平成29年10月31日までの間に入金を確認させていただきました個人379名、48法人・団体等の寄附者すべての皆様へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公開を希望されない寄附者の皆様につきましては、掲載しておりません。

また、万一お名前に記載漏れがある場合は、誠に恐縮ではございますが、基金事務室（電話：096-342-2029）までご連絡ください。皆様のご更なるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. お名前・寄付金額の掲載
（寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。）※（ ）内の数字は、累計寄附金額（万円）です。

＜熊本大学基金＞

【200万円】	熊本大学医学部医学科後援会 (320)			
【100万円】	西田 治義 (200) 医療法人回生会リハビリテーションセンター熊本回生会病院 (100)	株式会社高富士建設 (100)		
【50万円】	一般社団法人八代郡医師会八代北部地域医療センター (50) 医療法人社団清杏会清原医院 (50)	医療法人社団芳仁会 (50)		
	社会医療法人ましき会益城病院 (50)			
【30万円】	医療法人春水会山鹿中央病院 (30) 熊本大学同友会 (90) 山本建設株式会社 (32)			
【20万円】	石崎 昂之 (20) 石丸 隆久 (20)			
【10万円】	生田 翔 (35) 伊原 博隆 (10) 浦野 晴美 (20) 紙谷 正夫 (51) 川原 顕磨呂 (30) 清原 由紀夫 (30) 橋本 晏理 (10)			
	一般社団法人天草郡市医師会立天草地域医療センター (10) 株式会社杉養蜂園 (10)			
【6.3万円】	昭和44年卒東京同窓会参加者一同 (6.3)			
【5万円以下】	赤峰 糸子 (0.5) 赤峰 和幸 (0.5) 阿部 象輔 (1) 樺本 智恵子 (0.5) 出田 陽枝 (1) 出田 晴彦 (1) 井上 裕子 (13)	岩本 幸次 (0.5) 岡 直子 (1.5) 河喜多 一慶 (1) 菊田 毅 (2) 北園 芳人 (8) 古賀 雍正 (0.5) 柴田 龍男 (2)	田尻 純久 (0.5) 田中 茂 (1) 鳥居 建夫 (1.3) 鳥飼 慶 (3) 西野 隆一 (1) 東 良祐 (0.5) 平金 元 (0.5)	福岡 修治 (3) 藤原 素生 (6) 横田 健一 (1) 八戸 和男 (0.5) 山口 春芳 (0.5) 吉住 完治 (11)
	医療法人田中会田中歯科医院 (5) 秩父ファイヤーストーム寮歌祭 (5)			

＜熊本地震復興事業基金＞

【10万円】	浦野 晴美 (20) 熊本大学関西武夫原会 (61.2)
【5万円以下】	江藤 敏美 (2) 陣内 優 (1) 宮内 宏 (5) 渡辺 昭市 (7) 熊本大学工業会大阪支部 (16.8)

2. お名前のみ掲載
（五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。）※[]内の数字は、累計寄附回数（回目）です。

＜熊本大学基金＞

秋吉 博子	安部 英樹	荒川 孝成 [4]	井 世伊子	生田 博隆 [3]	泉水 仁 [4]	板井 正美 [6]	市川 広光
伊藤 幹郎	伊藤 義明	井原 秀俊	今井 榮子	今永 宮福	上野 周二	宇佐川 毅 [3]	内田 隆 [2]
大谷 順	大津 信人	大坪 米二郎	大林 浩	大村 千敏	岡田 光六	緒方 雄輔 [10]	岡田 洋一 [4]
岡部 進 [2]	小川 善弘	小川 安英	小田 匠馬	小田 知弥	鬼塚 鉄子 [5]	小野 敬太 [2]	尾原 祐三 [6]
甲斐 裕季子	角田 健一 [2]	片岡 ミドリ	金丸 純一	上岡 誠	河崎 功三 [2]	川浪 克助	河野 文夫 [4]
菊川 宏也 [3]	北原 隆司	木山 邦博	工藤 祥三	久保田 晴一	倉原 明敏	興梠 博次	児玉 陸雄
小堀 恭裕	小嶺 仁	齊藤 大樹	齊藤 昌子	坂本 達彦	坂本 優 [3]	佐藤 和代	西田 稔
猿渡 慶一	志垣 正敏	志岐 峰雄	篠崎 正十郎	柴田 鉄治 [5]	庄崎 茂和	杉田 興一 [6]	杉谷 賢一 [3]
鋤本 己信 [2]	杉山 新治 [2]	鈴木 保子 [3]	瀬野 照也 [2]	千住 寛 [6]	園田 真美子	園田 亮子	高木 彰信 [6]
高千穂 哲也	武生 孝一	竹中 正義 [5]	竹屋 元裕 [4]	立石 有香	田中 彰二	田中 正比古 [2]	田中 泰成 [2]
田邊 民義	田淵 一誠 [4]	柘植 さや子	寺田 祥治	戸塚 誠司 [3]	富岡 邦安 [5]	富重 靖彦	塘 正弘 [6]
中島 曜	中武 博	長野 佑子	中山 明倫	鍋山 明嗣	並川 和男 [3]	西岡 弘毅 [2]	西田 稔
西濱 秀樹	西村 由美	西本 敬	沼田 伸一	野口 雅章 [8]	梅林 金正	橋元 俊樹	長谷川 忠亮
波多野 恭行 [10]	馬場 秀夫 [10]	濱邊 鶴志 [5]	林田 淳子	平井 隆二	平江 文武	開田 一博	平田 智美 [8]
藤田 睦	藤本 高史	古堅 宗徹	前田 輝輝	松下 諄一郎 [2]	松田 俊郎	松田 元秀	松永 寛
松本 陽一	松山 宏治	右田 泰弘 [2]	養田 真幸 [14]	宮崎 寛	宮本 健	宮本 浩光	牟田 龍史 [2]
村井 淳男 [7]	村上 詩織	森 孝志	森 博幸	門田 依真	矢嶋 信光	弥永 典宏 [3]	矢野 修一 [2]
山縣 和也	山本 勲	山本 英彦 [5]	吉田 寛	吉永 ゆう子	廖 明子	若杉 昇	渡辺 健一郎

渡邊 智

一般社団法人熊本市医師会熊本地域医療センター
医療法人出田会 [5]
医療法人社団寿命会熊本機能病院 [2]
上田工業株式会社 [2]
球磨郡公立多良木病院企業団
有限会社福島文隆堂

一般社団法人玉名郡市医師会立玉名地域保健医療センター
医療法人永裕会たかはし歯科医院
医療法人社団松下会
株式会社アスク工業
社会医療法人黎明会宇城総合病院

一般社団法人日本健康倶楽部熊本支部
医療法人社団愛心会ヤマサキ胃腸科クリニック
医療法人山部会
株式会社パネックス [2]
チェスト株式会社福岡営業所

＜熊本地震復興事業基金＞

安部 英樹 [2]	泉水 仁 [5]	伊藤 義明 [2]	北村 裕介	坂田 隆	重留 正和	樋野 千寿	見島 正敏
森原 理絵 [3]	山下 洋史	熊本大学工業会東京支部（山水会） [3]					

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様
個人 177名、7法人・団体等

【お詫びと訂正】
「熊大通信」66号の1. お名前・寄付金額の掲載<熊本地震復興事業基金>の一部に誤りがありました。下記のとおり訂正させていただくとともに、読者の皆様、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。
○訂正箇所
KUMADAI TOPICS<熊本地震復興事業基金> 本文2行目 (誤) 【10万円以下】 山本 昌洋 (20) (正) 【20万円】 山本 昌洋 (20)

REPORT 熊本大学同友会30周年記念総会を開催しました

熊本大学同友会(森正臣、小野友道、赤星敦代表幹事)の三十周年記念総会が、8月26日(土)にホテル日航熊本において、62名が参加して開催されました。

当日は総会・講演会・懇親会の三部形式で行われ、総会では森代表幹事より熊本大学に寄付及び記念植樹の目録が贈呈されました(植樹式は11月17日(金))。

講演会では安東由喜雄熊本大学医学部長・大学院生命科学部部長が「治す神経内科疾患の実践—遺伝性アミロイドーシスの診断から治療まで—」と題した講演を行いました。

懇親会では原田信志学長、内田安弘熊本

学園大学経済同友会代表幹事、二塚信熊本大学同窓会連合会会長から祝辞が述べられた後、安田宏正熊本大学九州連合同窓会会長の発声で乾杯が行われ、会員同士が交流を深め、盛会の内にお開きとなりました。



熊本大学同友会30周年記念総会



熊本大学同友会30周年記念植樹式(本部棟横)

REPORT 平成29年度熊本大学卒業生表彰式を行いました

11月5日(日)のホームカミングデー当日、平成29年度熊本大学卒業生表彰を行いました。

この卒業生表彰は、平成24年度からスタートした表彰制度で、熊本大学の発展又は社会からの理解促進につながる顕著な功績があった本学の卒業生を、各学部等同窓会からの推薦に基づき表彰するものです。

第6回となる今回受賞となったのは、武夫原会(文・法学部同窓会)3名、教育学部同窓会1名、理学部同窓会2名、熊杏会(医学部同窓会)1名、薬学部同窓会3名、工業会(工学部同窓会)7名、医学部保健学科同窓会2名の計19名で、それ

ぞれの分野で顕著な功績を挙げられた皆様や、同窓会活動にご尽力いただいた皆様です。表彰式においては、原田信志学長から祝辞が述べられました。



REPORT 第7回熊本大学東京連合同窓会を開催しました

12月2日(土)、第7回熊本大学東京連合同窓会(瀬崎徳久会長)が、東京ガーデンパレス(東京都文京区)において、関東地区在住の同窓生など170名の参加を得て開催されました。

当日は、前半に総会・講演会が、後半に交流会が行われ、総会では、瀬崎徳久会長、二塚信熊本大学同窓会連合会会長による挨拶の後、来賓紹介、平成28、29年度の卒業生表彰受賞者紹介、役員等紹介が行われました。

講演会では、原田信志学長から「熊本大学の復興について」と題した基調講演が行われ、松村保広国立がん研究センター先端医療開発センター新薬開発分野長から「抗体医薬の多様性と事業開発」と題した特別講演が行われました。

交流会では、古島幹雄熊本大学理事・副学長、峯健二関西連合同窓会会長、安田宏正九州連合同窓会会長から祝辞が述べられた後、江口工東京連合同窓会顧問の発声で乾杯が行われ、参加者は賑やかに世代や学部を超えた

交流を楽しみました。

会の中では、理学部2年の中村あゆみ応援団団長から「巻頭言」と「五高寮歌」が披露されました。

閉会に際しては、今村遼平東京連合同窓会副会長からの挨拶で謝意が述べられ、盛況のうちに会は終了となりました。



挨拶をする瀬崎会長

REPORT 東京オフィスセミナー・関西オフィスセミナーを開催しました

首都圏と関西圏の一般の方を対象に、熊本大学への理解を深めていただくため、9月24日(日)に「東京オフィスセミナー」を、9月16日(土)に「関西オフィスセミナー」を開催しました。

当日は多数の参加者を迎え、東京は「熊本地震を科学する—熊本地震による熊本城跡と石橋の被害状況と要因分析」、関西は「2016熊本地震からの創制的復興にむけて」のテーマで講演が行われ、参加者からの質問に講師が答えるなど、盛会のうちに幕を閉じました。

熊本大学は、情報発信、企業との連携等をもって、熊本大学の教育研究の進展及び産学官連携の推進を図るため、県外拠点として、東京と大阪にそれぞれオフィスを設置しています。また、本セミナーは、毎年テーマを変え開催していますので、次回も多くの皆様のご参加をお待ちしています。



東京オフィスセミナーの様子



関西オフィスセミナーの様子



ストーブ会議 (五高記念館所蔵)

五高記念館となった赤レンガ造の校舎は教室棟であった。各教室の壁面には丸いブリキの板が一枚張り付いている。かつて石炭ストーブの煙突が取り付けられていた名残である。

冬の赤レンガ校舎は寒い。教室には石炭ストーブが焚かれる。休み時間になると生徒たちはその周りに集まって暖を取りながら談笑していた。その様子は何時の頃からか「ストーブ会議」と呼ばれるようになった。

日常のたわいのない話も多かったが、昨日観た映画の講評や最近読んだ本の感想、新聞を持ち込んでの政治談義、哲学、思想、宗教の話と多彩な話題で盛り上がった。

「こいつは、こんなことを考えているのか、難しいことを考えているんだな…と大いに刺激を受けたものだよ。」と五高の卒業生たちは口々に語る。

友の口から語られることで、深遠な話題も身近に感じられ、思考や人間性の幅を広げることに役立った。

ストーブ会議は暖かさを求めるだけではなく、コミュニケーション力や思考力を磨く場にもなっていたのである。

文 藤本 秀子(五高記念館)

※五高記念館(国指定重要文化財)は、熊本地震による被害のため長期休館中です。